

生活新聞

Hakuhodo Institute of Life & Living

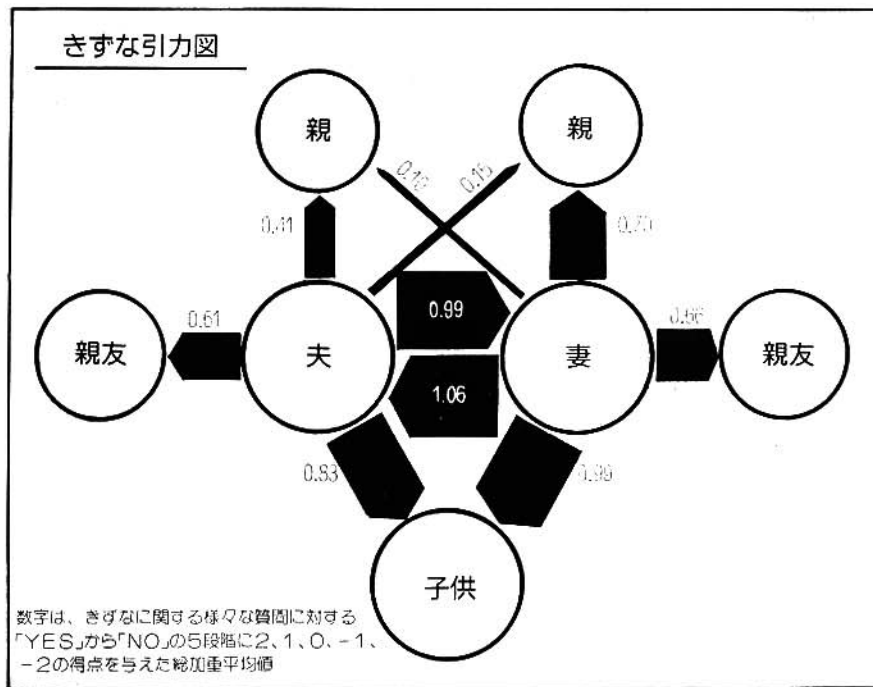
7.17

VOL.5 1985 No.11

博報堂生活総合研究所



引カUPの50代はきずなマーケットの適齢期



●きずな(絆)という言葉はもともとは馬の足を縛る紐を意味していたそうです。足を縛られた馬は行動が自由になりません。「体の自由を縛るもの」だったきずなが、やがて「心の自由を縛るもの」を意味するようになりますが、きずなの本来的な語源から言えば、心にかかる、まつわりつく、邪魔になるといったものだったのです。

しかし今ではきずなといえば、家族の、夫婦の、親子の、そして友情など人と人を結ぶ「情愛のつながり」をさすようになっていきます。

な文化的共同生活形態が次々に登場している。そしてこれらの共同生活形態がしだいに家族にとって代わろうとしている。その言葉通り、現代社会では共生する家族のきずなを持たなくても日常生活という面では何の支障もありません。家庭はただ寝るための場所という「ホテル家族」ということばもあります。

かつてのような倫理や既成概念で束縛された家族のきずなは崩壊しつつあります。家族をテーマとした数多くの出版物、テレビドラマ、そして社会統計の数字や事件が、揺れ動く家族のきずなをさまざまに語って

社

会システムが家族そのものであった頃は、家族は否応なくひとつのきずなで結ばれていました。きずなが弱まることは即、家族の崩壊であり、家族が崩壊すれば、衣食住のすべてに渡って頼るものも助けてくれるものもなく孤立してしまうからです。社会システムが形成されていってもなお、家庭は血縁者が共産、共食、共寝する共同生活の場でした。

しかし、フロイトは1930年にこう予言しています。「かつての社会では、家族は唯一の共同生活の形態であった。ところが、現代社会では、あとから生まれたさまざま

います。しかし、それらの現象は、現代は改めて家族のきずなが問い直されている時代だということの現われでもあります。それだからこそ、人々は逆に新しい家族のきずなを強く求めているともいえるのです。

そこで家族のきずな、そして拡大していく人間関係の中から親友とのきずなを取り出して、そのきずな引カ図の状況と、きずなを構成する要因を探ってみました。

夫

と妻それぞれが自分の親、配偶者の親、配偶者、子供、そして親友に対して、どの程度強くきずなを感じているかが左上の図です。きずな引カ図はいずれの関係においても女の方が高くなっています。女は配偶者、子供、自分の親、親友、配偶者の親の順ですが、男は自分の親よりも親友へのきずな度を強く感じているようです。

配偶者の親も親友と同じく血のつながりはありませんが、きずな度は親友よりもかなり低くなっています。特に女の低さが目立ちます。さすがに昔のような絶対服従といった嫁舅姑関係は無くなってきていますが、それでも女にとって、夫の親というのは何かと気になる煙たい存在でしょう。良い嫁プリッコで通すのはちょっとしんどいし、かといって本音を丸出しにしてはたちまち大激突ですから。女は配偶者の親に対するきずな度が低い分だけ、自分の親に対するきずな度が高くなっているようです。

年

齢によってきずな度がどう変わっていくかをみたのが下の図です。親とのきずなは、男は自分の親も配偶者の親も30代が低下し、その後は上昇していき、50代がもっとも高くなっています。女は自分の親に対しては50代がもっとも低くなりますから、50代で親孝行を思い出す男と、親離れす

る女というわけです。配偶者の親に対してはきずな度が年齢とともにぐんぐん上がっていきます。付き合い合った期間によって血縁はなくても身内意識が醸成されていくのでしょう。

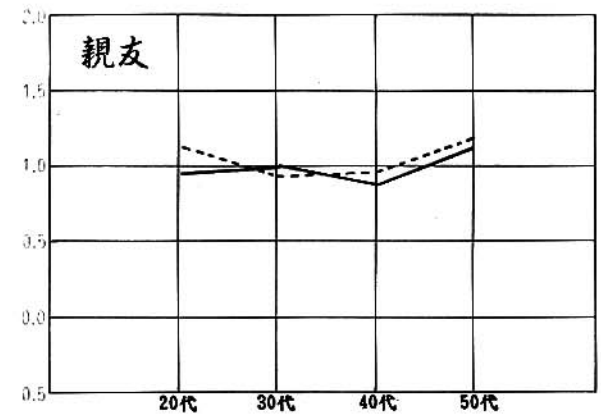
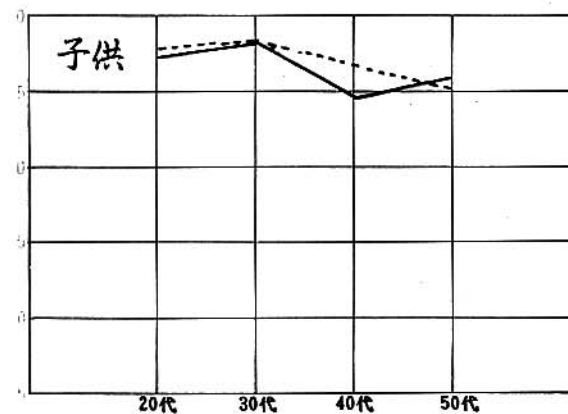
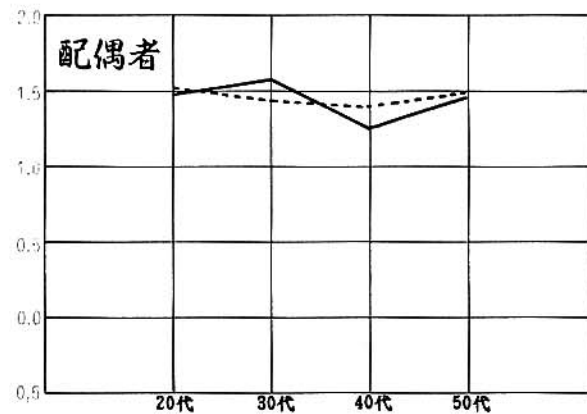
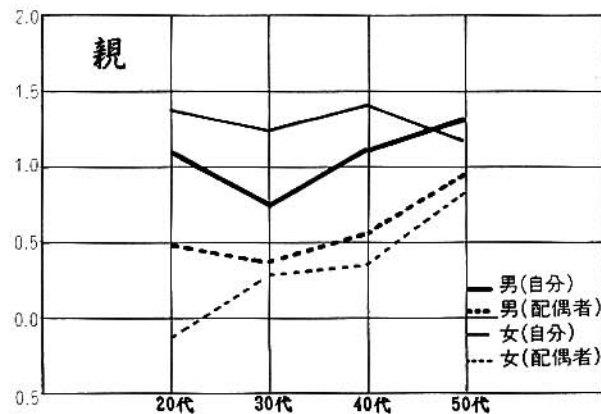
配偶者に対しては、40代に向けて漸減し、50代で持ち直す妻に対し、夫は30代で高まったきずな度が40代では大きく落ち込んでいます。30代は夫と妻のきずなギャップが心配ですし、40代は双方とももっともきずな度が弱いわけで、ここら辺に熟年離婚の芽が潜んでいるようです。

男は子供に対しても妻に対するような年齢カーブを描いていますから、40代の父親というのがもっとも家族に対するきずなが弱まっているわけです。女は子供が大きくなって自立していくにつれ、それまで注いでいた母心のはけ口を見失う空巣巣症候群が問題となっていますが、きずな度の強さでみる限りは30代を境に子離れしていきます。

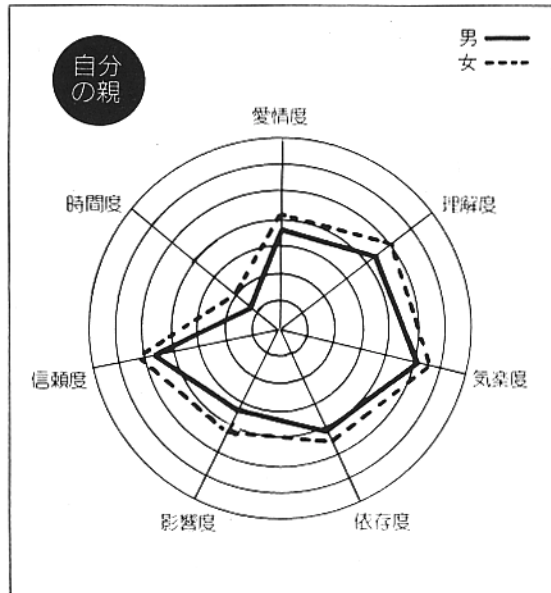
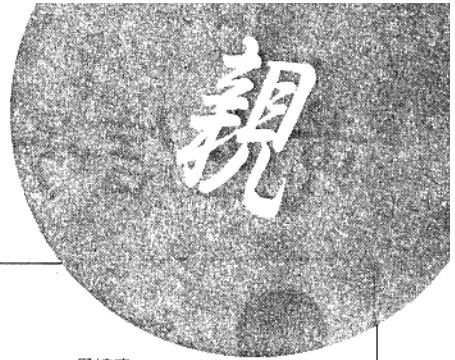
母の子離れと対象的な動きをみせるのが、親友へのきずな度です。子育てから解放されるにつれ、自分の友人との付き合いも深まっていくのでしょう。

いずれのきずな度も50代で高くなっています。現代社会におけるきずな関係は、血縁だけでなく、会社や仕事、メディア、街などさまざまなものとの間に張り巡らされていますが、50代ともなると家族帰りするわけです。50代はきずな適齢期。思い出作り、きずな強化への欲求が高まります。

次頁以降は、親、配偶者、子供、親友ごとにきずなを構成する要因を、きずなに関するさまざまな質問を愛情、理解、気楽、依存、影響、時間の要素別に分類したきずな要因グラフで探っています。



肩の力を抜いた気楽さが、きずな醸成のコツ



きずなという親子、夫婦など“家族”のきずなということがすぐ思い浮かびますね。しかし、家族のきずなと一口にいっても、夫婦のきずなと、自分が子の立場での親に対するきずなと、自分が親の立場での子に対するきずなとは、それぞれ、その成り立ちが異なっているのです。親子関係は血のつながりがある先天的な関係なのに対して、夫婦は他人同士が何等かの出会いを経た、後天的なきずなで結ばれているのです。

さらに、同じ血のつながりを持っている自分の親と自分の子供とでも、そのきずなの成り立ちが違ってきます。自分が親として子供と結んだきずなには、子供を産むこと、育てることを自分が引き受けたという意志が関与していますが、自分が子として親と結ばれているきずなには自分の意志が働く余地はありません。子供は親を選択できないのです。

その選択権の無さに、儒教的な「孝」の倫理が加わって、親とのきずなは人のきずなの中でも切ろうとしても切れないきずなであり、ある時はしがらみともなるものです(歌舞伎の中によく出てくる世界)。

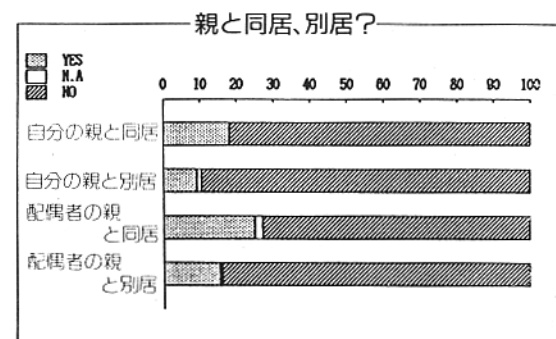
しかし、年長者であることが高い価値と権威をもった大家族制が崩壊し、両親と子供を中心にして形成される核家族化が進むにつれ、老人の知恵や経験は家族の中から除外されていきます。老人は家族のリーダーの地位から家族の一員に、そ

して寝たきり老人やボケ老人ともなれば、家族のお荷物扱いもされかねず、大きな社会問題となっています。また、長男・長女社会が進行するにつれ、自分の親だけでなく配偶者の親との関係も重要な問題としてクローズアップされてきます。

もはや単なる血のつながりや「孝」の倫理だけでは親との関係を計りきれないのです。そんな状況の中で、親とのきずなはどうなっているのかをみていきましょう。

きずなの強さという意味では、前頁にあるように親は家族の中で、子供の子になっていきます。しかし、自分の親と配偶者の親との比較では、自分の親に対するきずなの強さははるかに大きくなっています(自分の親=男0.41・女0.70に対し、配偶者の親=男0.15・女0.10)。血のつながりの方がきずなとして強いのです。

さらに、女は自分の親に対するきずな度が0.29ポイントも男より強く、結婚して親から独立した家庭を構えたにもかかわらず、実家との精神的なつながりが強いことがわかります。実家の親に引き換え、夫の親に対しては、夫の妻の親に対して持つきずな度より弱くなっています。

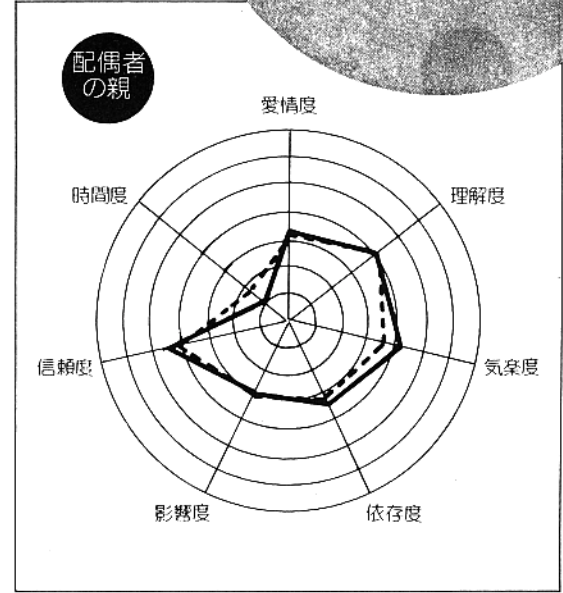
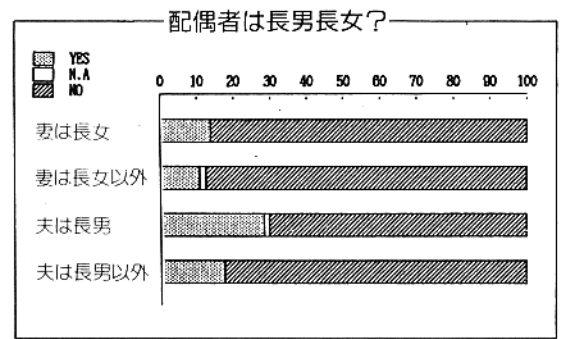


親の存在を負担に感じるか?

親とのきずなはどんな要因で構成されているか右上にある要因グラフをみてください。男女とも、自分の親に対してきずなを構成する要因としては気楽度がもっとも高く、次いで理解度、依存度、愛情度の順になっています。

これが配偶者の親となると、男は気楽度と理解度が同じようなスコア(自分の親よりはるかに低い)ですが、女は理解度の0.55に比べ気楽度が0.26と低くなります。やはり、女は夫の親に対しては嫁舅姑関係を意識してしまって、自分の親に対するようには気楽な態度ではられないようです。

自分の親と配偶者の親を比べると、女は全体的にどの軸をとっても差が男に比べて大きく、特に気楽度、依存度での差が大きいのが目立ちます。女に比べれば双方の親にあまり差がない男も、気楽さや依存関係となれば自分の親との差が高くなります。自分の親となら話なくても気話まりせずに気楽ですが、配偶者の親と2人だけだと話題にも気を使います。子供の近況報告が尽きると沈黙したり、妻の話題が悪口になっては逆効果です。



元気に暮らしていても、だんだん年老していく親のことは気掛かりなことであり、まして病気になったりすれば精神的にも経済的にも負担のかかる問題です。

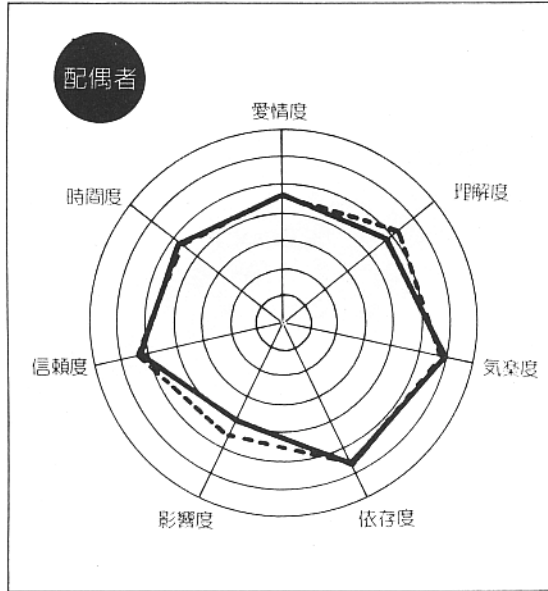
下左図は「親の存在を負担に思うことがあるか」という問いに対する同居別居別の回答です。親とはスーブのさめない程度の距離はおいた方が良いとはよく言われることですが、同居の場合は、たとえ自分の親であっても負担を感じる割合が別居の約2倍になっています。

これが配偶者の親になると、同居者の4人に1人は負担に感じていますし、たとえ別居していても15%は負担に感じると答えています。たまたま選択した夫や妻に付属して結ばれてしまったのが配偶者の親との関係ですから、きずな度の低い分だけ、負担感が増してしまうのも当然のことでしょう。

同じく、負担感を長男かそうでないかの別でみたのが下右図。親の面倒をみるのは決して長男夫婦だけの問題ではありませんが、現実には長男の嫁にしわ寄せされるケースが多く、この調査でも、夫が長男なし1人っ子だという妻の28.4%が負担感を感じています。

配偶者の親への孝行に努める気持ちはあっても、過度の負担は親とのきずなを“しがらみ化”してしまいます。そうならないためには、義理の親子関係だからといって構えずに、気持ちを楽にして付き合える人間関係作りが大切なようです。

黄色信号40代。夫婦の理解もまず会話から。



生 活新聞6.28号では、これからの時代に合った新しい夫婦像として、「個」と「全体」が矛盾することなく望ましい調和を保ちながら、一体感を持つ「ホロン夫婦」を取り上げましたが、もともと夫婦は他人の結合体であって、縁あって血のつながっていない「個」の間に何等かのきずなが結ばれ、「全体」を形作っているわけです。そこにはきずなを維持し、発展させるために双方の努力が必要です。

最近、夫婦論が盛んです。夫唱婦隨にしろ、婦唱夫隨にしろ、かつての夫婦は、内情はともあれ外に対してはひとつの「全体」としての顔を持っていました。しかし、多忙な夫が夫婦のきずなの手入れを怠っている間に、自立する妻が増加して、「個」として家庭の外部と直結したきずなを持ち始め、それに引き換え、夫婦のきずな感が弱まっているのではないか、それが夫婦のギャップとしてあらわれているのではないかという不安が生まれているのです。

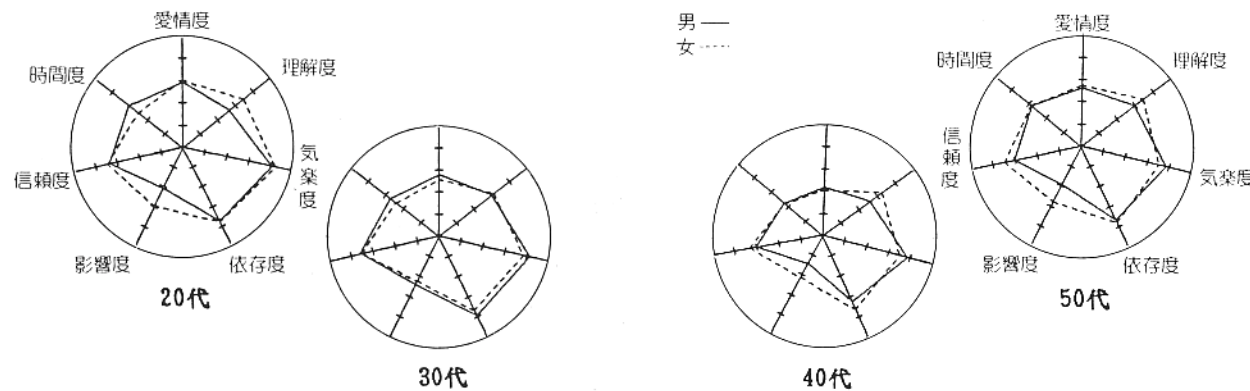
し かし、夫の妻に対するきずな度は0.99、妻の夫に対するきずな度は1.06ですから、ここで取り上げた関係の中の強さということでは夫婦の間のきずな度がもっとも高くなっています。しかも、妻の方がきずな度を強く感じています。

要因グラフでもほぼ同じような図を描いていますが、そのなかでは理解度、影響度などは妻のポイントが高くなっています。ここら辺りに夫婦のきずなのギャ

プがありそうです。

例えば、お互いに相手をどのくらい理解しているかを「夫(妻)にプレゼントするとしたら、その好み・趣味はわかっているかどうか」でしてみましょう。この質問に対するYESは夫は76.0%なのに対し、妻では91.5%の人が自信を持っています。結婚記念日に必ず妻へプレゼントをする夫は若者世代で28%、スニーカーミドル世代で10%、GAPPIE世代で5%いましたが(生活新聞6.28)、せっかくプレゼントされても、もらった妻のうち4人に1人は、気持ち嬉しいけど私の趣味じゃないわと思っているかもしれないのです。これを年齢別にみると、女は40代の妻が最も夫の好み・趣味をよく把握していますが、逆に夫は40代で若干ながら落ち込みが見られ、この世代の夫婦で配偶者の好み・趣味把握のギャップが最も大きくなっていることがわかります。

最 初に夫婦のきずな度の年齢変化をみましたが下はそれを要因グラフにあてはめたものです。全体として夫婦の調和がとれているのは30代ですが他の年代は夫が妻に、妻が夫に感じるきずなの構成要因にギャップがみられるのです。



愛情度は20代、30代、40代と年齢と共に低下していきます、50代で再び上昇しますが、夫婦の間にはあまり大きな差はありません。

理解度では、夫の妻に対するものは、30代で高まったものが40代では低下し、50代で再上昇します。子供が生まれ、育児やしつけ、教育などをめぐって何かと妻の考え方を理解する機会の多い30代と、仕事に忙殺されて妻を理解することがおそれる40代の違いといえそうです。妻にはあまり年齢変化は見られませんから、40代の夫婦の間の理解度ギャップがもっとも大きく、40代の妻には夫が私をちょっとわかってくれない、理解しようと努力もしてくれないという不満が高まります。

影響度では30代以外は妻のスコアがかなり大きく夫を上回っています。20代と50代の妻はどちらかといえば、影響を受ける側に立っています。「夫に教えられることが多い」(20代の妻の82.0%)とか、「夫から多くの影響を受けている」(50代の妻の90.0%)とくにYESと答える人が多いのです。40代の妻は夫に影響を受けていな

いし、与えてもいないとクールですが、40代の夫のクールさが妻を上回っているため、影響度のスコアの夫婦比較では妻の方が高くなっています。

30代は、夫が「自分は妻に影響を与えている」という人が82.0%(20代76.0%、40代58.0%、50代64.0%)と、他年代の夫に比べて妻への影響力に自信を持っていますが、逆に「妻から影響を受けている」という人も他の年代に比べて多くなっているために、妻とのスコアが接近しています。30代は夫婦の理解度が一致していました。お互いに理解しあえば、影響も相互通行できるわけです。

夫 婦のきずなが切れれば、離婚ということも起きるわけですが、昭和39年以降離婚率は上昇を続け、57年には人口1,000人当たりの離婚率は1.39にまで高まりました(厚生省「離婚統計」)。離婚率そのものは夫も妻も年齢が若いほど高いのですが、最近の傾向として中年層での離婚が目立ってきたと報告されています。

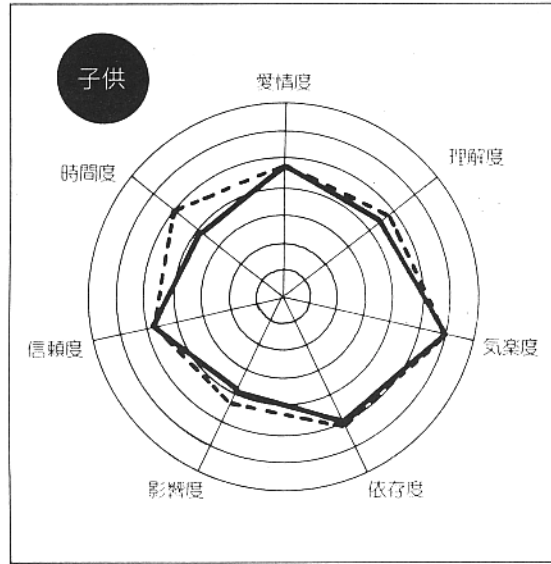
そこで「夫(妻)と縁を切りたいと思ったことがありますか」という質問をしてみたところ、YESは夫の11.0%、妻の17.0%でした。これを年齢別にみると20代では夫婦ともに多く(夫20.0%・妻18.0%)、妻より夫のほうが多いのはこの年代だけです。他年代はいずれも妻の方が「縁を切りたいと思ったことがある」という人が多いのです。なかでも40代の妻が目立ち、夫との差も大きくなっています(夫10.0%・妻22.0%)。

冒頭の頁にあったように、きずなの強さは40代がもっとも弱まっていますし、夫婦の年齢別要因グラフでも40代の夫婦のきずなバランスが他年代に比べてだいぶ変形していることがわかります。愛情度も夫婦共に低くなっているのです。

「妻にいい顔しながら、なおかつ仕事に100%打ち込むなんて不可能ですね。でも妻はどこかで、僕のことをわかってくれていると思う。言わなくても見えない糸でつながっている」という夫もいます。40代の夫は、先に述べたように、自分は妻への理解度が足りないと自覚していながら、妻にはわかってもらえると思っているわけです。しかし、妻だって夫に同じように私のことをわかって欲しいのです。

40代の夫が、もっと妻の理解に努めないと、妻は「くれない族」の反乱に走り、ある日突然夫は縁切り状を突き付けられてしまうという危険がありそうです。

子供とはもっとつきあいましょう、お父さん



子供はかすがい、という言葉通り、夫婦のきずなをより堅固にするのが子供の存在だと言われてきました。しかし、最近ではこのかすがいの接合力も弱まってきています。厚生省の「離婚統計」によれば、離婚した夫婦の子あり率は増加の一途をたどり、昭和25年から昭和48年ごろまでは、離婚件数の60%以下だった子あり夫婦の離婚は、49年に60%を超えて以来、毎年上昇を続け、57年には69%と7割に迫っています。しかも、離婚の申し出を見ると、全体の55.3%が妻からの申し出であり、加えて、離婚後の子供の養育費の負担も、妻が全部負担している割合が54.8%(それでも10年前の65.6%よりは減っているのですが)と過半数になっています。つまり、子供がいて、その養育もすべて自分がやらねばならなくても、離婚を申し出る妻が多いということなのです。子供がいるから我慢をし、耐えている母親は減ってきています。夫とのきずな引力が消滅すれば、離婚には踏み切るけれども、子供とのきず

な引力は離れがたく母子を結び付け、子供の養育も自分の手でしたいということ、「離婚統計」は語っています。つまり、必ずしも、子供は夫婦のかすがいにはならなくなっているわけでは

今 回のきずな調査では子供とのきずなを夫の側、つまり子供の父親側と、妻の側、つまり母親の側の両面から調査しています(調査対象者で子供のいる割合は89.5%、平均子供数は1.9人)。左上の要因グラフを見てもすぐにわかるように、子供とのきずなは母親のほうがだいぶ強く感じています。前出のきずな引力図でも男(つまり父親)の0.83に対して、女(つまり母親)は0.99と0.16上回っています。自分が産んで育てたという自負のある母親ならではの強さでしょう。要因グラフできずなの構成要因を調べてみると、父親と母親のきずなの強さの差を作っているのが、接触時間の違いであることがわかります。他の要因も多かれ少なかれ、母親のほうが父親を上回ってはいますが、なかでも父母の間で時間度だけが大きく隔たっています。スキンシップという言葉が、実感を持って迫ってくる結果に、かたがとのお父さんも多いのではないのでしょうか。

長 子の年齢によって、きずなの強さがどう変わっていくかを見たのが下のグラフです。一般的には子供の年齢が上がると、きずなは弱まってきています。各構成要因とも子供の年齢が上がると、スコアが下がってきています。その中で、信頼度だ

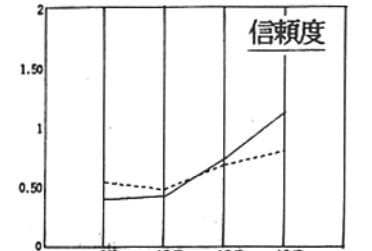
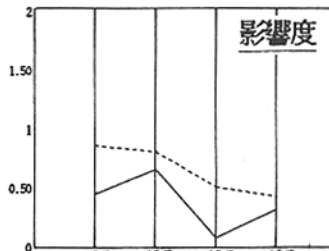
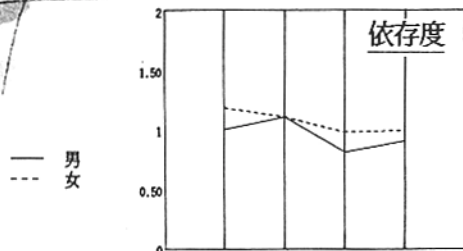
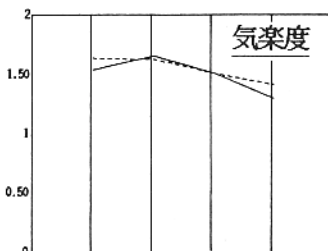
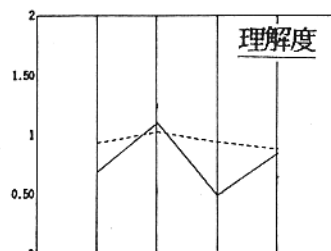
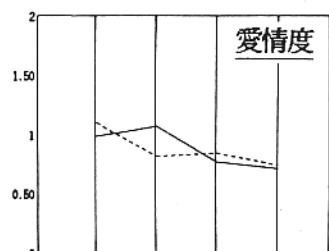
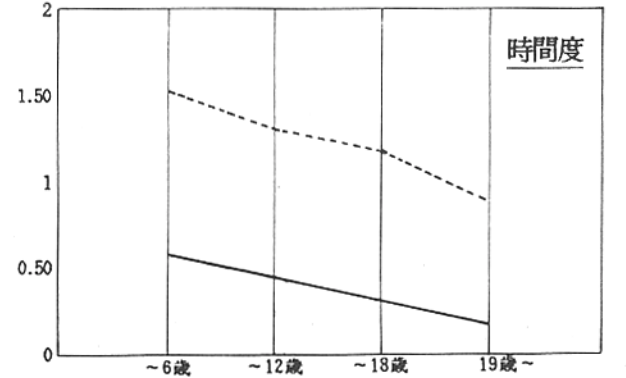
けは反対に上がっていています。子供が大人に近づくにつれ、子供との信頼関係を強めていく、つまり、子供を一人前の人間として扱っていききたいという親心が現れています。

そ の他の要因で目立つのは、13歳から18歳までの子供の父親のきずなの弱さです。理解度、依存度、影響度などで、極端に落ち込んだ結果がでています。夫婦のきずなのところでも指摘されている40代の男のきずなの弱さが、子供と父親の関係においても現れています。13歳から18歳の子供の父親がちょうどこの40代というわけでは、会社では上下の世代にはさまれて、板ばさみで苦勞したり、家に帰れば帰ったで、生き生きしている女房と比べて、疲れを休める個室も無いといった、悩めるGAPPIE 予備軍としては、子供も頼れる味方とは思っていないようです。子供を理解できないし、もちろん依存はできない、おまけに影響力もほとんどない、というこの父親像が家庭内暴力の遠因というのうがちすぎでしょうか。

愛情度を見ると、7歳から12歳までの子供だけが、父親のほうが母親より上回ったスコアをあげています。そして、理解度、気楽度、依存度、影響度なども他の年齢に比べると一際スコアを上げています。子供が小学校に入って、母親にゆとりの時間ができ、家からの脱出願望が高まるのがこの時期です。そして、パートに出たり、仲の良い友人達と勉強や遊びにと大活躍が始まるにつれて、子供に対する執着が薄れてくる

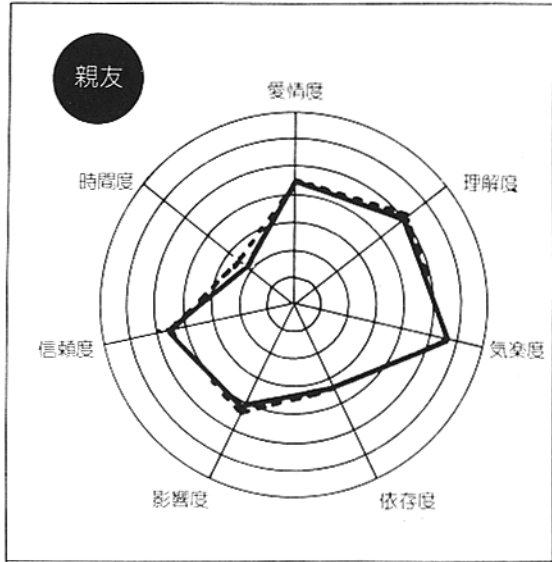
ということをこのスコアは示しています。つまり、母親の子供離れが始まるのがこの年齢というわけです。

こ の年齢の子供たちの母親、父親は共に団塊の世代の新中年が中心層ですが、母親の外志向が高まるのに反比例して、父親が子供に愛情を注ぎ始めています。ここには新中年の家族一緒にしたいという特徴が、父親に顕著に現れているのかもしれない。愛情度から影響度まで、多くの側面で、7歳から12歳までの子供の父親が高いスコアを示していることが、そこを裏書しています。ただ、時間だけはさすがにかんともしがたく、時間度においては、どの年齢の子供についても、母親と父親では、大きな隔たりをみせています。母親達が外に出始めたとはいえ、子供が帰る時間には家に戻っていたいというのもまた母親の心の中では強い願望です。それに比べて、たまの休日ぐらいいし子供と一緒に過ごさない父親では、子供との接触時間が少なくなるのもいたしかたありません。この時間度グラフでも母親と父親では接触時間に大きな差があることは一目瞭然です。きずなを形成していく時期には、接触頻度、密度がなによりものをいいます。お父さんももっと子供との接触を持つように努力しないと、きずなは強まらないというものです。今日は早く帰って、お子さんと話しなどしてみてはいかがでしょうか。



親友

親友は拡家族の時代にはファミリーの一員



核 家族の時代になってくると、遠くの親戚より近くの友人というケースが増えてきます。主婦も自由な時間の増加にともなって、交際範囲が広がってきます。パートに出ている主婦たちには職場の友人もできるでしょうし、カルチャーセンター仲間のグループの輪のような友人関係もできます。男も学校時代の友人達と勉強会のグループを作っていたり、趣味を同じくする親友たちと家族ぐるみでのつきあいをしていたりします。そこから、昔の親族同士の大家族とは異なった形での友人達との大家族、つまり核家族ならぬ「拡家族」関係が生まれてきます。ここでは友人も家族同然という扱いをされるのです。土曜、日曜など週末に、様々な関係の友人家族と同じテーブルを囲む「拡家族のだんらん」風景も珍

しいものではなくてきています。そこで、きずな調査においても、親友も家族と同次元で扱って、きずな度を調査しています。ここでは、自分の最も親しい友人を一人思い浮かべてもらって、その親友とのきずな引力について聞いてみました。他のきずなに比べると、さすがに子供や配偶者とのきずなよりは弱くなっていますが、男女共に配偶者の親よりは強く、男は自分の親よりも強いきずなを親友との間に持っていることは前出のきずな引力図でわかります。きずな度は他のきずなに比べると男女の差は多くはありませんが、やはり男性よりも女性のほうが高く、親友との関係においても、きずな引力が女性上位であることを示しています(男0.61、女0.66)。

要 因グラフを見ると、親友とのきずなの最も高い要因は気楽さです。複雑さを増す現代社会の人間関係の中で、選択の自由度の高い(つまり、いやならすぐに関係を解消できる)親友との気楽な関係は他には代えがたいきずなの一つです。親友の種類を問わず、気楽度は7つの軸の中では最も高く、なんでも気楽に話せる関係が、友人関係では重要なことがわか

ります。なかでも学校時代の親友とは特に気楽度が高く、「おれ、おまえ」でつきあえることが、きずなを強く構成しているようです。そして、親友とのきずなで最も低いのが時間度です。確かに、一緒に住んでいるわけではないし、会える時間が週末や特別な時に限られているのが親友とのつきあいですから、時間度のスコアが低いのもむべなるかなです。しかし、会える時間が少なくても、親友とのきずなは確固たるものがあります。長く会わなくても、再会すればすぐに昔のあだ名で呼び交わしたり、打ち解けた雰囲気を作られるのが親友なのです。親友を種類別に見てみると、男女共に同級生や恩師といった学校時代の親友が最も多く、男は43%、女は42%がそうです。ただし、年代別に親友の種類を見てみると、男女では異なっており、男は若い層では学校時代の親友がトップですが(20代は62%、30代は46%が学校時代の親友です)、年代が上がるにつれて職場の友人が増えてきます。40代では40%、50代では46%が職場の同僚や先、後

輩を友人として持っていると答えています。男の時間の多くが職場で過ごされていることを考えれば、当然の結果といえましょう。

愛 情度、理解度、気楽度の3点は昔から気心の知れた同級生が最も高く、依存度、影響度は各親友関係とも同じくらいのポイントです。信頼度は学校時代の友人と職場の友人が高く、時間度は当然、現在も長い時間一緒に過ごしている職場の友人という結果です。

女性はきずな度が強いのが、ちょっと意外な感じがしますが、職場関係の友人です。有職主婦は勿論のこと、専業主婦でも、かつて勤めていた時代の親友と、今でも仲良くしている例は、周囲にも多く見られることでしょう。気楽度を除く他の要因はすべて職場の友人が高いポイントをあげています。ただし、職場の友人を親友と答えた人はそう多くなく、12%程度しかいませんでした。最も多いのは前にも述べたように、学校時代の友人です。

年代別に親友の種類を見てみると、男性と同様に若い世代は学校時代の友人が多く(20代の67%、30代の52%がそう)、40代になると、近所の人や、子供を通じて知り合った友人(共に25%がそう、ただしグラフ中ではその他に含まれています)が、50代はまた学校時代の友人が31%とトップにきています。コミュニティーのつきあいの中でできた友人が多いのが40代、ナイスミディーパスで学校時代の友人達との思い出話を花を咲かせる旅をするのが50代の主婦たちといったところなのではないでしょうか。7つの軸ごとにみると、男とそう違いがなく、親友とのきずなは男女で差がないことが特徴の一つかもしれません。

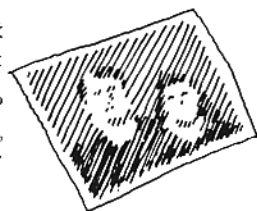


▶ 親友に関するデータあれこれ—— 親友の性別 同性97.1% 異性2.9% / 年齢関係 年上32.1% 年下15.9% 同い年 51.7% / つきあい年数 5年以下10.4% 10年以下30.8% 15年以下19.8% 20年以下18.8% 30年以下14.4% 31年以上3.9%

きずな引力を マーケティングに 応用すると…

★家族のきずなを強めるものは、
一緒に楽しんだ思い出です。

男たちに家庭返り願望が高まるのは50代です。しかし、家族サービスに不慣れて喜ばれる思い出の作り方がわかりません。彼らを応援する商品やサービス提供を。



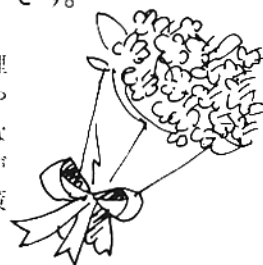
★多世代同居は母娘のきずなを中心に
暮らすのがハッピーです。

気楽にできないのが夫の親とのつきあい、つい愚痴も出ます。夫は間で板ばさみ。母系大家族なら嫁姑戦争も避けられます。多世代住宅は母娘共同戦線への対策が肝要。



★よりよいメオトホロンを築くためには
夫の努力が決め手です。

夫婦ホロンのためには相互理解が大切です。愛情も言葉や形で表現しなくては伝わらないのに夫にはテレや面倒感があります。それを解消する方策を考えましょう。



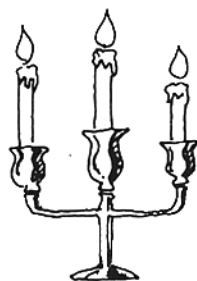
★父親は子供とのきずなに
コンプレックスがあります。

父親が子供と遊ぶ時間が少ないのはいたしかたないことです。しかしそのことで後ろめたさを持っている父親もまた少なくありません。父子での共同冒険の提唱を。



★核家族の時代は拡家族での
交際が望まれています。

家族ぐるみでの交際はいまや常識。しかし中年層は若い人ほどパーティー慣れしていません。場所、企画、用品などのパッケージはギフトにも喜ばれそう。



★生活四季報夏号は7月23日発刊です。

感性の時代といわれるなかで、一体「好き嫌い人間」は、どのくらいいるのでしょうか。また、人々の好き嫌い感覚は、どのように変化してきているのでしょうか。10歳から59歳までの男女72名のグループインタビューと、600名アンケート調査をもとに、「好き嫌い」の実態をご紹介します。乞、ご期待!

★生活特報「生活基本調査」が出ました。

「生活新聞」4月30日号で特集した、「生活行動基本調査」の詳細なデータを満載した生活特報が発刊されています。普段、なにげなく行動していることにも、意外と現代社会を反映させた意識が潜んでいたりします。ちょっと気になる生活行動を、6つの角度(好奇心度、洋度、シャイ度、アバウト度、潔癖度、その他)から、若者(20代)、中年(40代)合計800名を調査してみました。